

阿寒摩周国立公園

報告者：環境省阿寒摩周国立公園管理事務所 所長 河野通治

阿寒摩周国立公園は今年の8月に阿寒国立公園から名称が変わり、それに併せて神の子池周辺が新たに公園区域に加わった。

阿寒摩周国立公園の満喫プロジェクトは、「火山、森、湖が織りなす原生的な自然を堪能する」をコンセプトとして取り組んでおり、年間6.3万人の外国人来訪者を、2020年までに15万人に増やそうという目標を掲げている。「原生的な自然で過ごす上質な時間」「原生的な自然の保護を前提とした新たな活用」「アイヌ文化の体感」の3つをキーワードに取り組みを進めている。

現在、新たな活用に関する取り組みとして、マリモの観察ガイドツアーの検討を進めている。マリモ自体は北半球に広く生育しており、日本各地の湖沼にも生育している。ただし、現在、球状のマリモが見られるのは世界中で阿寒湖のみであり、国の特別天然記念物に指定され、厳重に保護されてきた。今年にはマリモの命名から120年という節目の年となる。最近では阿寒湖の水質が改善したということもあって生育環境は改善されてきたが、水草との競合が新たな課題になっている。現在、実物のマリモを観察できるのは阿寒湖畔のエコミュージアムセンターとチュウレイ島にあるマリモ展示観察センターの2つの施設のみである。これまでマリモは厳重に保護されてきたため、なかなかすぐに実施できるものではないので、地域での合意形成を図りつつ検討を進めている。今年7月に、環境省の事務所と釧路市の教育委員会が事務局となり、マリモの保護と活用に関するプロジェクトチームを立ち上げ、地域の様々な関係者に参画頂き、現在、4つの利用方法を検討している。1つ目は陸からのアプローチで、阿寒湖の北側に林道があり、そこからマリモの生育地に近づいていく方法。2つ目はチュウレイ島まで船で行き、そこから別の船に乗り換えて上陸してそこからマリモの生育地を見る方法。ただし、これらの方法では、実際に生きているマリモを現場で見るとは難しいので、3つ目としては水路でのアプローチで、水草除去等のマリモ保護活動プログラムとして、船舶を使って生育地に乗り入れる方法。4つ目としては冬場になると阿寒湖は凍結するので、スノーモービル、スキー等で生育地の近くまで移動して、氷に穴を開けてマリモを観察する方法を検討している。

マリモ保護のための資金をどのように確保していくのか、ガイド育成をどうするのか、船舶を使用する場合もマリモへの影響を最小限にする必要があるなど、解決しないといけない課題がたくさんあるので、すぐに実行することは難しいと考えているが、来年からは試行という形でまずは取り組みを進め、うまくいけば翌年から本格的なツアーとして扱うことができると考えている。

また、別の新たな取り組みとして、環境省の施設であるエコミュージアムセンターの民間開放を考えている。エコミュージアムセンターには、主に休憩機能、交流機能、情報発信機能、外国人への情報提供機能の4つの機能が求められると考えているが、それらに対応する形で民間に開放していきたいと考えている。まず、現在は特別展示などで

使用しているセンター2階のスペースを大胆に改修し、休憩、交流機能を備えたカフェスペースを整備することを考えている。また、既存のカウンターを民間に開放してツアーデスクとしての機能を持たせていくことも考えている。

また、全体的な取り組みとして外国人への情報提供として ICT を活用した多言語化については、公園区域内では共通のモバイルアプリ(ユニボイス)を活用することとし、案内板等の整備については、盤面にアイヌ模様を取り入れることによりデザインの統一を図っていきたいと考えている。

引き続き、阿寒摩周国立公園の満喫プロジェクトに関心を持って頂き、実際に足を運んで頂ければ幸いである。